

国 語

(問 題)

2026年度

〈R08172064〉

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～17ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよごれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルでいねいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の指定された場所(2カ所)に、氏名および受験番号を正確にいねいに記入してください。
 - (2) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
 - (3) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
 - (4) 解答の際は、「、」や「。」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに入してください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 問題冊子の余白などは利用してかまいませんが、どのページも切り離さないでください。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
9. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

次のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① 同じ失敗をしないようぜんしよします。
- ② 海上保安庁の第三かんくを調べてみる。
- ③ 仏教にはさまざまなしゆうはがあります。
- ④ 災害地のふっこうのために現地へ行った。
- ⑤ おりの中でライオンたちがあばれている。
- ⑥ 山のいただきから大きな岩が落ちてくる。
- ⑦ いくつもの困難を経てわたしたちは成長した。
- ⑧ 多くの人と話をすることが母の元気の源です。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その昔、ユダヤ人大量虐殺を実行したナチス親衛隊の中間幹部アイヒマンは、戦後の法廷でこう語った。「自分は、当時の規範にしたがって、命令を忠実に実行しただけだ」と。もちろん、この言い分は、まったくの嘘ではない。しかし、そうだからといって、彼の責任が不問に付されるわけではない。彼の責任が問題になるのは、まさに役割とは独立な間柄の局面において、である。もちろん、人道にたいする犯罪の責任を問われたとき、アイヒマンとしては、人道にたいする犯罪などというのは敗戦後、戦勝国側の検事が新たに持ち出してきた概念にすぎないと抗弁できるし、自分としては、当時の規範にしたがって自分の役割を忠実に遂行しただけだと抗弁できる、と考えたとしても不思議ではない。では、当時の状況に照らしても否定できない責任とは、何なのだろうか？

「規範にしたがって役割を遂行しているだけ」のときも、彼はなぜ私を殺すのか？と問いかける囚人の視線に出会っていた。

この眼差しは、殺すか殺されるかという白兵戦での眼前の敵兵の視線とは異なる。いくつもの点で違うが、少なくとも、問いかけられているという事実を認識でき、応答の仕方を考える立場にあった、という一点においてすでに決定的に違う。アイヒマンは、もしかしたら、その眼差しに気づいていたのかも知れない。しかしやっただから判断しても、事後の自己正当化の仕方から判断しても、彼は、

生殺与奪を彼に握られていた囚人の眼差しから、なぜ、あなたは私を殺すのか？という問いが発せられていることを受けとめて、その問いかけに答えなかった。というより、応えるべき問いかけが発せられている、という事実を抹消しようとしつづけた。これこそが、人間のあり方として責任を考える次元である。

印欧語では、「責任（リスポンシビリティ）」という語は、「応答（リスポンス）の能力・可能性（アビリティ）」に由来する。すなわち、1. なにかをする／したとき、そうなる／なった原因ではなく、他ならずそうする／した理由を問われうるし、「そうでなく、こうしたら」と呼びかけられうる、のみならず、2. そう問われ・呼びかけられたら、答えうる。そのように互いに「問いかけ・呼びかけうるし、応じうる」間柄を生きることに、これが「責任がある／を負う」ということの根幹である。

大きな石が行く手をふさいでいる。そのとき、石にむかって「もしも」と呼びかけることは、意味をなさない。道をあけてくれるように頼むことも、道をふさいでいる理由を尋ねることも、石にたいしては、まったく無意味でしかない。呼びかけたところで応答がもどってくることはありえないからである。そのときには、呼びかけや問いかけが無意味であるというよりも、そもそも、呼びかけや

問いかけという行いが成立しない。しかし、私たちは、他人に向かつて、呼びかけることができる。呼びかけうるし応じられうる、ということ、人の間が成り立つための根本的な条件である。

では、まったくはじめて遭遇したエイリアンの場合は、どうだろう。彼らは、私たちとそっくりの体つきをしていて、私たちの言語とそっくりの音声を発している、としよう。しかし、そうだとすると、こちらから呼びかけるとはかぎらない。呼びかけのつもりで語った言葉を、相手はどう受けとめるのか、そしてどう応じてくるのか。それが、^bか**い**もく見当がつかないなら、^②こちらから呼びかけるとはできない。「もしもし」と呼びかけたら、相手は侮辱されたと思って、いきなり殴りかかってくるかもしれない。いや視線を相手に固定しただけで、彼らは宣戦布告と受けとめて、無茶苦茶に攻撃してくるかもしれない……。もし、このように、相手が私たちの呼びかけをどう受け取るのか・どう応じてくるのが、まったく分からないなら、私たちは、怖くて呼びかけようと試みることをさえない。

しかし、それが人間の常態なのではない。では、私たちは、どのようにして、互いに呼びかけ・応じうる間柄を生きていられるのだろうか？

こちらの呼びかけのふるまい・言葉を、相手はどう受けとめるだろうか？ かりに、呼びかけとして受けとめてくれたとしても、そ

れに、どう応じてくるだろうか？ こうした予測がまったくできずに不安なままだとしたら、そもそも呼びかけることはおろか、相手に視線を向けることさえできない。したがって、呼応可能な間柄が成立しているということは、相手の受けとめ方や応じ方について不安にならずにすむ、ということでもある。そのためには、最低限、ふたつの条件が満たされていなければならない。

ひとつには、その状況で「相手は、私のふるまいを、どう受けとめるだろう」ということについても、「そう受けとめたら、相手はどう応じるだろう」ということにかんしても、「私たちは、みんな・ふつう、こう受けとめ・こう応じるはずだ」という予期が、共有されていなければならない。初対面の相手にむかって上半身を前傾させれば、相手は、私のふるまいをあいさつの行為として受け取ってくれるだろうし、そう受け取ったなら、いきなり泣き出したり、殴りかかってきたりはしないはずだ……。お互いに、こうした予期を抱くことができなかつたら、呼びかけもなにもあったものではない。

このような予期は、「私たちはみんな」という形で一般化されている。**A**、「はずだ」と言えるだけの確かさをもっている。もちろん、予期は、あくまで予期にすぎないのだから、「予期せぬ」仕方では応じられることもある。しかし、それが常態なのではない。私たちのふるまいが、「私たちはみんな……と受け取るはずだ」という形で一般化されているとき、そうした予期とまったく違

って受け取られたり、応じられたりするならば、「そんな変な受け取り方、応じ方をしたほうがおかしい」とされる。つまり、「はずだ」という予期は、たんに「なるだろう」という予測ではなく、誰でもそう「すべきだ」という規範性を帯びている。こうした「一般化」された「規範的」な予期は、いかなれば、その社会での「生活の文法」なのである。

このように共通の生活の文法にしたがうことが、互いに呼応可能であるための条件である。しかし、この条件がみたされるためには、さらに複雑な条件がみたされていなければならない。まず第一に、相手のほうは、「私が、相手のふるまいをどう受け取る」と予期しているのか。相手が私に堪して抱いているこうした予期を、私のほうも予期できなければならず、予期は、互いに「予期についての予期」という形をとる。これは決して単純なことではない。

そのうえで第二に、自分に向けられた予期に、特別の事情がないかぎり背かない、という構えが必要である。相手が「おはよう」と言ったとき、相手は「おはよう」という自分の言葉が、あいさつとして受け取られるだろう、と予期しているし、そう受け取られたら、あいさつが戻ってくるだろう、と予期している。私は、即座に、そう理解する。そのとき私は、「あんたは、自分の発した『おはよう』が、あいさつとして受け取られると予期しているのだろうが、世の中はそう甘くないぞ」と言わなければかりに、相手に蹴りを入れて「死

ね」と応ずることはしない。少なくとも、通常は、しない。

特別の事情のないかぎり、自分に向けられている予期を予期したなら、それに真っ向から背く応答は、私もしないし、相手もしない。私たちの日々の生活は、このことへの信頼のうえに成り立っている。こうした信頼が可能な関係を、日本語の語感からは少しずれるけれども、「(ミニマムに)信頼可能」な間柄、と呼ぼう。

「おはよう」と語れば、あいさつとして受け取られるはずだ……。こうした予期を「信頼」と呼ぶのは、あまりにも大げさと思われるかもしれない。しかし、必ずしも、そうではない。そもそも、信じるとは、まだ起こっていないことを、起こるのであると先取りし、それを当てにして、こちらから一步を踏み出すことである。言い換えれば、信用が裏切られたときのコストを想像したうえで、信じることである。にこやかに「おはよう」と語ったとたん、いきなり睨み付けられて蹴りを入れられる。こうした「予期せぬ応答」は、ありうる。相手が、どう受けとめるのか、どう受けとめて・どう応答してくるのか。それは、あくまで不確定である。

B

私たちは、通常は、そうした未来の不確定性に悩むことなく、相手に向かって「おはよう」と語ることができる。

相手の予期を予期しえたなら、特別の事情がないかぎり「予期せぬ応答」をしない。たしかに、これだけでは、「信頼」と呼ぶにはあまりにも薄い、と思われるかもしれない。しかし、こうしたミニ

マムな信頼関係は、呼応が可能のための、したがって「責任」という概念が意味をもちうるための根本的な条件である。繰り返せば、そもそも、信じるとは、まだ起こっていないことを、起こるであろうと先取りし、それを当てにして、こちらから一步を踏み出すことである。言い換えれば、信頼とは、自分に向けられた期待を裏切ることが可能なときでも、裏切らないし、相手もまたそうである、と互いに信じることに他ならない。

しかし（これは人間のあり方を考えるときには、とくに重要なのだが）、そうした信頼関係は、おのれひとりの中で、おのれが誠実に信じることによって、生じるのではない。そもそも、信じるということは、ひとりで闇雲やみくもになされる決断ではない。信じるという態度は、「どうやら相手は、私がいきなり裏切ることにはあるまい、と信じているらしい」という気配に誘導ゆうどうされて、どちらか一方の功績こうせきに帰せられないような仕方かたで、生成する。

こうした信頼関係の生成は、^④鶏と卵にわとりのように循環じゆんかんしている。その循環を断たって最初の一步を探せ、というのであれば、話は、たぶん乳幼児の無条件な信頼に行き着こう。乳幼児は、放っておけば確実に死ぬ。しかし、そうした乳幼児は、親ないし養育者を無条件に信頼する。そのとき親・養育者は、自分が無条件に信頼されている、という事実の重さと有り難がたさを感じ、信頼の重みを思わざるをえなくなる。鶏と卵ではあるが、あえて探すなら、はじめの一步は、ここにある。

もちろん、こう言ったからといって、乳幼児の無条件の信頼によって、人の間の信頼関係がはじめて生成する、などと言っているのではない。私たちは、そのつど・すでに、少なくともミニマムな信頼可能性が成り立っている間柄にある。無条件の信頼の贈与そうよによって、無から信頼を最初に生成させるような個人はいない。乳幼児に言及げんきゅうしたのは、信頼の成立をめぐる鶏と卵のような循環が、論理的な悪循環あくじゆんかんとは違う、ということを示すためにすぎない。

その点を確認かくにんしたうえで続けて言えば、信頼は、本質的に **C** 的な側面をもつ。もちろん、信頼は、こちら側の **D** 的な姿勢である。しかし同時に、幼児の無条件の信頼に接した親がそうであるように、私は相手から信頼されている……という気配に動かされて裏切れなくなる、という **E** 性もまた、信頼の本質的な要素なのである。

このように、^⑤「責任のある（リスポンシブル）」ということの根幹は、「呼応可能」な、すなわち共通の生活の文法のもとで、ミニマムな信頼が可能の間柄である。したがって、「責任」という概念は、日々の語感からすると奇矯ききょうに響くかもしれないが、第一次的には、人の間にかかわる。「責任がある／を負う」というのは、第一次的には、人間関係の特質なのであって、特定の諸個人の属性や態度ではない。

（大庭健『責任』ってなに？』より・一部改）

※抗弁……相手の主張に対して反論すること。

※白兵戦……戦争において相手と接近し直接戦うこと。

※印欧語……インドやヨーロッパの言語のこと。

※ミニマム……最小。

※コスト……費用。時間や労力。

※奇矯……言動がふつうと異なっているさま。

問一 —— a 「不問に付される」 ・ —— b 「かいもく」 ・ —— c 「功績に帰せられない」の本文中の意味として最も適切なものをそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

a ア 大事おほことにされる イ 問題とみなされる ウ 問いただされぬ エ 十分に果たされぬ

b ア まったく イ なんだか ウ はっきり エ とにかく

c ア 責任にできない イ 手がらにできない ウ 失点にはできない エ 実績とせざるをえない

問二

A

 ・

B

 に入る語句をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア とはいえ イ そのため ウ のみならず エ にもかかわらず オ うってかわって

問三 —— ① 「眼前の敵兵の視線」とありますが、これはどのような存在として相手を見る視線ですか。「存在」に続けられる二十字の語句を本文中から抜き出して、はじめとおわりの三字を答えなさい。

問四 —— ② 「こちらから呼びかけることはできない」とありますが、どのような状態であれば呼びかけられますか。「状態」に続けられる二十五字の語句を本文中から抜き出して、はじめとおわりの三字を答えなさい。

問五 — ③ 「複雑な条件」とありますが、どのようなことが条件となるのですか。その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 相手の行動や心理に対する予期を互いに重ねあいながら、それに反することをしないと相互きょうごに信じあう関係が成立していること。
- イ 相手の心理を自分があらかじめ想像することにより、相手が予期しうる行動のみをとることができるような状態にしていくこと。
- ウ 相手と自分とが社会規範の中で生きていくことを互いに確かめるとともに、互いに相手のふるまいを尊重できる状態であること。
- エ 相手と自分とが呼応可能な存在であることをどちらか一方が信じることで、次の全ての行動を互いに予期しうる関係にあること。

問六 — ④ 「鶏と卵」とありますが、ここではどのような意味ですか。その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 別々のものに見えて性質に大きなちがいが無いという意味。
- イ どちらがより大切かを決めることが困難であるという意味。
- ウ どちらが原因か結果かを決めることができないという意味。
- エ 生み出すものと生み出されるものは対等でないという意味。

問七 —

C

 ·

D

 ·

E

 に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|
| ア | C | 能動 | D | 能動 | E | 受動 |
| イ | C | 受動 | D | 能動 | E | 受動 |
| ウ | C | 能動 | D | 受動 | E | 能動 |
| エ | C | 受動 | D | 受動 | E | 能動 |

問八 — ⑤ 「責任のある（リスポンシブル）」ということの根幹は、『呼応可能』な、すなわち共通の生活の文法のもとで、ミニマムな信

頼が可能な間柄である」とありますが、これをふまえると「アイヒマン」の責任についてどのようなことが言えますか。四十六字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 本文の書かれ方を説明したものとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 最初に自分の考えを一通り説明して、それに対する意見に反論したうえで、自説の正しさを最後に強調している。
- イ 一つの仮定からはじめて、具体的な例によってそれをさまざまに考察し、自分の結論へ読み手をみちびいている。
- ウ 二つの対照的な考えを説明したうえで、それぞれの長所と短所を全て挙げ、一つにまとめあげて結論としている。
- エ はじめに実例と基本の考えを示し、それが成り立つために必要なことを、具体的な例を挙げながら説明している。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【本文までのあらすじ】小学校に通い始めた一年生の作次は、用務員にコンセントの場所を聞く。コンセントの前で不思議な動作をする作次に、用務員は何をしているのかと聞く。作次の答えは、用務員にとって理解しがたいものだった。

作次は、町の裏山を越えたところにある杉里すぎざとという谷間の村から、十九人の仲間たちと片道一時間の山道を歩いて学校へ通っていた。

仲間たちといっても、学年がまちまちだから、朝は村の庚申塚こうしんづかの前に集まって一緒に出かけってくるものの、午前授業の土曜日を除くと、帰りは大概たいたいばらばらになる。とりわけ、今年の村の新入生は作次ひとりで、しかも一年生は学校中でいちばん早く帰ることになるから、作次はひとりぼっちになってしまふ。いくら赤子のころからひとり①でいることには慣れていていっても、ひとりぼっちで一時間の山越えをするのはさすがに心細い。それで作次は、学校が早く退けても、町はずれの木橋のたもとにあるバスの発着所で、誰か村へ帰る道連れみちづれが通りかかるとのを待つことにしていた。

日によっては、一時間も、二時間も待つことになったが、作次は退屈たいくつなどしたことがなかった。彼は、そのバスの発着所が気に入っていた。なによりも、その待合室のベンチの蔭かげに、コンセントがあるのが嬉うれしかった。待合室だから人目は避けられなかったが、コ

ンセントのすぐそばのベンチが空いていればなんのこともないわけだし、すこし離はなれていても、例②の一連の作業を手早くやりさえすれば見咎みどがめられる気遣きざいいはなかった。学校の用務員さんばかりではなく、バスを待つひとたちにもプラグやコードは見えないのだから、誰だっけ子供が退屈たいくつ凌しのぎになにかして遊んでいるのだとしか思わな

い。朝から微弱びじやくな乾電池かんでんちで辛抱しんぼうしてきた作次には、待合室のコンセントは難儀なんぎな山道の途中とちゆうに湧わいている泉いづみのようなものであった。それを存分に味わうことのほかに、作次にはまだ、することがあった。外の広場にたむろしている古い仲間たちに、一応おんぎょう挨拶あいさつをして回らねばならない。とても退屈たいくつなどしている暇ひまがないのだ。

古い仲間というのは、勿論もちろん、村の子供ではない。第一、彼等かれらは人間ではない。その人間ではない古い仲間とはなにかというと、それはバスの車体のうしろについている冷却器※ラジエーター※のファンのことだ。

作次は、バスの冷却器のファンとはまだ赤子のころからの付き合いであつた。作次の父親は出稼でかせぎ専門の大工だが、その父親の送り迎むかえに、よく母親の背中に揺ゆられてこのバスの発着所まで山越えしてきたからである。父親は、どういふものか最後部の座席の隅すみっこが好きで、始発のバスに乗り込むと、きまつてそこに席を取つた。勢あい、見送る母親はバスのうしろに立つことになる。父親が窓のガ

ラスに額を押して見下ろすので、母親はもっとよく見えるように背中の作次をその方へ揺すり上げる。すると、作次の顔が、ちょうど冷却器のファンの高さになった。

エンジンが始動すると、同時に作次の目の前で、ファンも唸り上げて回り出す。やがて、バスは青い煙を吐きながら、今度はいつ帰るとも知れない父親を運び去る。作次には、回り出すファンは別れの合図であり、その低い唸りは別れの音であった。何度も別れを繰り返すうちに、その合図と音が、赤子の作次の目と耳に焼きついた。しまいには、その冷却器のファンそのものが、バスの一部ではなくて、良くも悪くも自分とは**b**の**b**びきならぬ関わりのある一匹の生きもののようにさえ思われてきた。父親を連れてきたり、また連れ去ったりするばかりではなく、途中の山道で母親を薄気味悪くなるほど浮き立たせたり、歩くのがやっとの病人のように萎れさせてはすすり泣きまでさせたりする、一匹の不思議な生きもののように。

いま、こうして自分が **A** になってみると、バスの冷却器のファンこそが自分の最も古い仲間だったということがわかる。作次は、コンクリートの広場に出て、時々街道の方へ目をやりながら、これから出ていくバスや帰ってきたバスの冷却器のファンに、「居だがい。」といちいち声をかけて歩く。居だがいというのは、村で近所の家を訪ねるとき誰でも最初に口にする言葉で、まず、こんにちは、という挨拶に相当する。

そういえば、作次がああ古ぼけた扇風機とただならぬ仲に陥ったのは、「居だがい。」と行って訪ねてくるひとに、「居ね。」と返事をするためにひとり留守番をさせられたころのことであった。

作次が三つになったばかりのころ、父親が出先で怪我をして帰ってきて、半年ほど仕事を休んだことがあった。その半年の間、母親が代わりに町の煉瓦工場へ働きに出たが、父親の怪我が治ってまた旅へ出かけてからも、母親は日銭の味が忘れられなくてそのまま煉瓦工場の女工をつづけていた。けれども、物蔭に寝かせておける赤子とは違って、やっとな腰に自信をつけた三つの子など、とても危険な工場へ連れてゆけない。それで、作次はひとり留守番をさせられることになったのだが、三つ子のひとり歩きが危険なのは村もおなじだから、このあたりでエンツコと呼んでいる藁でお碗の形に編んだ揺籠のなかに、腰から下をすっぽりと埋め込まれての留守番になった。

母親は、毎朝、出かける前に、作次にたっぷり時間をかけて用足をさせ、赤子のときに使った襁褓を当ててからエンツコのなかにあぐらをかかせて、そこから脱け出せないように、何本もの腰紐で作次の体とエンツコを雁字がらめに縛りつける。自由に使えるのは、首から下では左手だけで、その手でそばに用意された昼の握り飯を食ったり、水を飲んだり、おやつのお饅頭を口に入れたり、痒いところを掻いたりする。

雨戸を開けたままの縁側から、「居だがい。」と声をかけるひとが

いれば、すかさず、「居ね。」と返事をする。相手は大概びっくりして、「ほうい。居ねと返事をするひとが居るってば。」と、障子を細目に開けてみて、「ははあ、エンツコで留守番な。」と笑う。なかには、外も見えないのでは鬱陶しかろうと云って、障子を半分ほど開けていつてくれるひともいる。

夏になると、作次の顔や背中に汗疹が出た。北国でも、真夏になると、日中は三十度を越す日が何日もつづく。母親は、痒い汗疹が搔けるように右手も自由にしてくれた。その上、物置から、首を振るたびに全身ががたと顫える古ぼけた扇風機を出してきて、それをすこし離れた飯台に据え、そばのコンセントに自分でプラグを差し込んだり抜いたりすることを許してくれた。作次は、コンセントにプラグを差し込むと、扇風機の羽根がひとりでに回りはじめるのを見て、びっくりした。それから、母親の背中から見たバスの冷却器のファンを思い出した。あれとそっくりではないか。まるで、そこにバスが一台、いまにも走り出そうとしているみたいではないか。

作次は、夕方母親が帰ってくるまで、汗疹の痒さも忘れて何百回となくコンセントにプラグを差し込んだり抜いたりして遊んでいた。彼には、扇風機の風よりも、それが自分の言いなりに回ったり停まったりするのが嬉しくてならなかった。そんな遊びを何日もつづけているうちに、彼には、やはりその扇風機もあのバスの冷却器のフアンのように、ただの風を起す器械ではなくて一匹の生きもので

はないかという気がしてきた。実際、全身を顫わせながら首を振っている扇風機に耳を澄ますと、そこからきこえるさまざま音が、なにかぶつぶつ呟いているようにも、ひそひそ笑いをしているようにも、咳をしているようにも、喉を鳴らしているようにもきこえる。彼は、扇風機に話しかけることをおぼえた。扇風機になんでも話すようになる、自然に扇風機の言葉もわかるようになった。

秋の中頃、作次は、扇風機のおかげでエンツコから解放されることになった。彼は、母親に頼んで、夏のさがりが過ぎてからも相変わらず扇風機だけを遊び相手にしていたが、彼に扇風機さえ預けておけば、べつにエンツコに縛りつけておかなくても、一日中、家のなかで静かに遊んでいられることが、母親にもだんだんわかってきたからである。彼が扇風機とどんな戯れ方をしても、母親は時々呆れたように笑うだけで、なにも文句はいわなかった。母親にすれば、遊び相手がなんであれ、子供が静かに留守番をしていてくれさえすればよかったのだ。

作次は、お互いにもっとよくわかり合えるようになりたくて、自分も扇風機のように電動の器械だったらよかったのと思うようになった。できることなら、いまからでも扇風機になりたい。そんな願いを持ちながら、仮に自分の下腹にもプラグとコードが詰まっているものとして、それを股座から引き出してコンセントに繋いで遊んでいるうちに、そのプラグやコードがだんだんはつきりと目に見えるようになってきた。母親にはなにも見えなかったが、彼の目に

ははつきりと見えた。コンセントにプラグを差し込むと、流れ込んでくる電流のために快い震動が体の隅々にまでひろがるさまも、手に取るようにわかった。

作次が、どうとう自分も電気で動く人間になれたと思ひ込むようになったのは、それからである。

コンセントがなくても、乾電池さえ手にしっかりと握ってれば外へも自由に出歩けるのだと気がついたのは、去年の旧盆に父親が珍しく土産に買ってきてくれた、電池で水の上を走り回る海豚の玩具がヒントになった。作次は、その玩具から抜き取った細身の乾電池をいつも左手に握っていたが、村の仲間たちはそれを知ってもべつに怪しみもしなかった。村には、乾電池よりもおかしなものを宝物のようにしている子が他に何人もいたからである。

けれども、町の学校へ通いはじめると、左手を握ったままでは都合なことがいろいろと出てきた。教室にいる間はともかく、校庭に出ると、そのためにへまばかり重ねることになった。ドッジボールのボールが取れない。野球のバットが握れない。鉄棒にただぶらさがることすらできない。作次は、みんなに嗤われた。なかでも、意地悪な連中は、不意打ちに襲いかかってきて左手の乾電池を奪い取るうとしたこともあった。

「作次君ねえ」と、ある日の放課後、担任の女先生が作次の肩に両手をのせて、顔を覗き込むようにしながらいった。「あんた、電

気で動くんだった？ 先生はね、そのことはもうずっと前に用務員のおじさんから聞いて知ってたんだけど、いままで黙って様子を見ていたの。でも、あんたにはちっともおかしなところが無いわ、電気のことさえ除けばね。電気のことだけは、どうしてもわからないの。だから、先生に教えて。どうしていつも電池を手に握ってるの？」

作次は、仕方なく、

「こいつがねっと、おらは死ぬすけ。」

といったが、それ以上のことはなにを訊かれても言葉で答えることができなかった。

「じゃ、こうしましょう。」と、女先生は **B** を投げたようにいった。「夏休み中に、いちど先生とお母さんと三人でゆっくり相談しようね。早くその電池を手放さないと、作次君、厄介な病気になるかもしれないわ。いい？ 約束よ。」

けれども、夏休みよりも、あの日の方が先にきてしまった。

一学期の終業式の日、北国では珍しく朝からひどく暑い日だった。ひさしぶりに村の仲間が顔を揃えて帰ることになったが、町はずれの木橋の上から川で子供たちが大勢水浴びしているのを見ると、六年生のひとりがおら達も一と浴びしていくべしといひ出して、みんながそれに賛成した。作次も、みんなのうしろについて河原へ降りた。

パンツ一つになって浅瀬で水をはね上げていると、いつのまにか

クラスの男の子が五、六人、まわりを囲むように寄ってきて、

「汝、電池握ったまんまで、泳げると。」

とひとりがいった。

「泳げるせ。」

と作次は即座に答えた。あの父親の土産の海豚のように。

「んだら、泳いでみれ。」

作次は、不意に肩を突かれて、他愛もなく深みの方へよろけていった。滑って、尻餅をついたところを、ぐいと早い流れに引き込まれた。とっさに、右手で杖に掴まったが、川藻のぬめりで、手のひらが滑った。思わず、今度は左手で次の杖を掴もうとして、その拍子に、大事な乾電池を手放してしまった。

作次の体から、急に力が抜けてしまった。声を立てることも、も

がくこともできなかった。手足が早くも硬直して、頭が錘のように先に沈んだ。作次は、ありったけの息を吐き出して顔のまわりにあぶくを散らすと、それきりなにもわからなくなった。

(三浦哲郎「ロボット」より・一部改)

※庚申塚……中国の信仰をもとに建てられた石塔。

※プラグ……コードの先の、コンセントに差し込む部分。

※冷却器……エンジンの熱を冷ますための装置。

※ファン……送風機。

※日銭……その日のうちに入ってくる収入。

※汝……「おまえ」の方言。

問一 — a 「勢い」・ — b 「のっぴきならない」・ — c 「ただならぬ」の本文中の意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で

答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|--------|---|----------|
| a | ア | 必然的に | イ | 物理的に | ウ | 持続的に | エ | 相対的に |
| b | ア | とんでもない | イ | あいられない | ウ | やりきれない | エ | さけられない |
| c | ア | おにあいの | イ | ふつうでない | ウ | よそよそしい | エ | おどろおどろしい |

問二 B にあてはまる二字を自分で考え、ひらがなで答えなさい。

問三 本文中の「部」のように「のうち、性質が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。」

ア 病人のように萎れさせては

イ 目に見えるようになってきた

ウ 手に取るようにわかった

エ 宝物のようになっている

問四 — ①「赤子のころからひとりであることには慣れてる」とありますが、そのいきさつを説明した段落のはじめの五字を、抜き出して答えなさい。

問五 — ②「例の一連の作業」とありますが、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 実在するコンセントに、自分のポケットから取り出した実在するコードの先のプラグを差し込む作業。

イ 自分が想像した乾電池を左手に持ち、自分と仲間にだけ見えるコンセントに右の小指を差し込む作業。

ウ 他人に見えないコードを足の間から引き出し、その先のプラグを実在するコンセントに差し込む作業。

エ 足の間から実在するコードとプラグを引き出し、自分にだけ見えるコンセントにそれを差し込む作業。

問六 A に入る七字の語句を、本文中から抜き出して答えなさい。

問七 — ③「あのバスの冷却器のファンのように」とありますが、「作次」にとって「ファン」はどのようなものとして感じられていますか。その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 一台のバスだけに取り付けられており、父親や母親を自分のもとから奪い去ってしまう力があるが、親しみも持てるもの。
- イ バスを動かせる力はあるが、自分自身の意思はなく、父親を連れ去ることにより母親を悲しませてしまうおそろしいもの。
- ウ バスを風力で動かす能力を持っており、それにより両親や自分を、どこか遠くへ移動させようとする意思をそなえたもの。
- エ 自分の意思を持って動き、父親を連れ去ったり連れもどしたりして、それにより母親を悲しませたり喜ばせたりするもの。

問八 — ④「急に力が抜けてしまった」とありますが、なぜですか。その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 作次は、実は本物のロボットになっていたにもかかわらず、電力がすっかりなくなってしまったから。
- イ 作次は、自分が実はロボットではなくて、電気は必要でなかったことに気づきショックを受けたから。
- ウ 作次は、電力を失うと動かなくなってしまふという心理が、体にまで作用するようになっていたから。
- エ 作次は、電気で動くことをうたがわれたので、それがないと動かない体質だと見せつけたかったから。

問九 「作次」が、先生が心配するような状態になったのは、なぜですか。本文全体から考え、四十六字以上六十字以内で説明しなさい。

(以下 余白)

